

プロジェクトの概要

琉球大学島嶼地域科学研究所
狩俣繁久

本書は、令和3年度文化庁委託事業「危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究」の成果を報告するものである。

我が国における言語・方言のうち、消滅の危機にあるものについて、ユネスコが平成21年に発行した“Atlas of the World's Languages in Danger”の内容及び、平成23年度から平成26年度にかけて大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所及び琉球大学島嶼地域科学研究所（平成30年4月1日に国際沖縄研究所から改称）が実施した文化庁委託事業「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業」及び「危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係わる取組等の実体に関する調査研究事業」を参照の上、消滅の危機にある七つ（八丈方言、奄美方言、国頭方言、沖縄方言、宮古方言、八重山方言、与那国方言）の区画のうち、琉球諸語に関わる6区画において、音声資料、調査研究が十分とは言えない地域の方言について、当該地域の方言の保存・継承に資するため、アーカイブとして公開することを想定した実地調査及びその分析（以下「アーカイブ研究」とする）、方言の保存継承に資する諸研究（以下「保存調査研究」とする）を行った。

本年度実施するアーカイブ研究については消滅の危機に瀕しているとされ、音声資料、文法資料の調査研究が保存・継承にとって十分ではない琉球諸語の6区画のうち、奄美語の鹿児島県大島郡徳之島町（徳之島）、国頭語の鹿児島県大島郡和泊町（沖永良部島）、同じく国頭語の名護市饒平名（屋我地島）、同名護市久志、宮古語の沖縄県宮古島市下地来間（来間島）、同宮古島市上野野原（宮古島）、八重山語の沖縄県石垣市大浜（石垣島）、与那国語の与那国町祖納（与那国島）の8地点において、将来のアーカイブ化を想定して臨地調査を行った。

昨年度、コロナウイルスの感染拡大によってアーカイブ研究の調査研究を完了できなかった鹿児島県奄美市笠利佐仁、沖縄県うるま市与那城宮城（宮城島）、沖縄県粟国村（粟国島）、石垣市川平の補充調査を行ない、その成果についても本報告書に掲載している。

今年度もコロナウイルスの感染拡大の影響を大きく受けて、現地調査が難しく、インターネットを利用した遠隔調査や郵便を利用した調査を実施したが、このような調査に不慣れな年配話者への調査には制約も多かった。コロナウイルスの終息を強く望むものである。

本事業は、2年計画のものである。その1年目にあたる本年度は、本事業で調査対象地としている上記8地点での調査（音声資料を含む）は当該方言の文法的な特徴が分かるよう、動詞の活用体系および動詞を述語にもつ文の構文論的な特徴の概要を調査するための2種類の調査票を新しく作成し、それを基にした臨地調査を実施した。

なお、2年目にあたる来年度は、形容詞および述語名詞の形態論、および、名詞に接

続する格助詞・取り立て助詞のリストとその例文の調査研究を行う計画である。この 2 年間の調査研究によって、当該方言の文法に関する基礎的で総合的な記録保存が可能になる。また、本年度大きくリニューアルしたサイト「シマジマのしまくとうばー危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究ー」を琉球大学島嶼地域科学研究所のホームページで公開する。

保存調査研究については次の二つを行った。

琉球古典音楽の師範免許保持者と琉球舞踊の教師免許保持者を対象に琉球音楽（古典音楽・民謡・童歌）の指導としまくとうば習得に関する二つのインタビュー調査としまくとうばを用いた琉球舞踊の指導と言語習得に関するインタビュー調査に基づいた報告を本報告書に収録している。また、大島郡瀬戸内町出身で同町を拠点に積極的な演奏活動を展開している若手唄者へのインタビューを行ない、それを軸に奄美大島における島唄とシマブチの伝承における課題をまとめた報告も本報告書に収録している。

アーカイブ研究及び保存調査研究の成果については、令和 4 年 2 月 6 日に沖縄県西原町にある琉球大学で対面と遠隔を併用した成果報告会を開催し、意見交換と討議を行う予定であったが、コロナウイルスのオミクロン株感染が急拡大（第 6 波）したために、ZOOM による遠隔開催のみで実施した。

本年度の成果については、琉球大学の島嶼地域科学研究所の HP で公開する。合わせて、事業報告書を作成し公表するものである。